

わたしの実践的自己啓発論

koberyo1

「人間の生き方には、過去を向いた伝統的志向と、大志を抱いて挑戦していく未来志向の二つがある」と思う。

新国劇の俳優に島田正吾さんという人がいた。明治38年に横浜市でうまれた。大正12年に沢田正二郎を慕い、18才で新国劇芝居の世界に入った。そして役回りを自分で開発して生きてきた人物である。自己啓発を一生涯、通してやってきた人である。有名な言葉に次のようなものがある。

- ①人を引き付ける華になれ。
- ②何事もあきらめずに耐えることである。
- ③不撓不屈、生涯挑戦者であること。

最近自分は何に向いているのか、何が得意科なのか。これを見極める自己発見が少ないように思えてならない。

自分の人生、何をして一生涯、生きるのか。はたまた、何をすれば己の才能を開花させることができるのか、あるいは、社会や世界にたいし、何で貢献できるかが問われているといえるだろう。

そのためには、学校の先生や家族の導きも大事だが、みずからの内に秘めたるチカラ、潜在能力を引き出すため、みずからを教育する自己啓発をたゆまずおこなってゆことが大切だし、自分がじぶんを求めてゆく気構えが重要であると思う。

わたしが幼少のころ、読んだ偉人伝の書物にエジソンがいた。だれもが知っている偉大な大発明家である。二百回もの失敗をかさねながらなお、今日でいうポジティブな姿勢をつらぬき、「必ずや実現できる」と堅い信念のもと、即時に行動に移すのと、「おや、ダメだ。ぼくにはとてもできない」とマイナス思考に心を蝕まれるのでは、おのずと結果が違ってくるものである。継続はチカラなり、というコトバが証明しているではないか。あれこれ思い悩むより先に手を動かすべきなのである。

これはサイエンティストであれ、新国劇の役者であれ、なんら変わる事のない普遍的な真実である。すなわち、芝居を研究する島田正吾さんとて、エジソンとなんら変わることはないのである。

そして偉大な先達たちが残した事績を貪るがごとく吸収することからはじめなくてはならない。彼らを人生の師匠として見習った上で、無理のない目標をたてることである。もっとわかりやすくいえば、人生は毎日、少しずつコツコツと積み上げるものからできている。知識のみならず、自分の健康だって「健康管理」という観点からするなら、自己の努力目標になる。勉強だけではない。健康だって運ではなく、努力であり研鑽であるのだ。努力を積み重ねる者だけが自分を限りなく成長させ、そして、その先にひらけいく将来を垣間見ることができるのである。

ダラダラしてはいけない。ここでもっとも重要であり、大切なのは「時間」である。今日、いま「このingの瞬間」をかんがえず、無駄にしていまい、有効活用できないことは、なんともったいないことであるか。いたずらに人生の持ち時間を空費してはいけない。これでは人生の目的もなければ、目標も「ない」、ただ生きているのと同じ動物とおなじ境涯に落ちてしまう。たとえ、能力や知識があつたとしても、動物に墮落してしまえば、それを生かす道は断じて閉ざされるのである。自分が動物になっていないか、つねに眼を光らせ、怠け心を監視していなくてはならない。

もし、事前に計画をたてることなく、日々を漫然と過ごすのであれば、それはいくら才能があつても、自己を有益に生かす道がないのとおなじである。実際に世の中にいればすぐにわかることだが、これから求められるのは、自己を世の中にむかって押し出してゆく発信能力であることは身にしみてわかってくる。なぜなら、同じ条件をそなえた競争相手がふえ、苛酷な戦いを強いられるからである。標準化がすすみ、差別化がむずかしくなってきたのが一番の要因だろう。一昔前なら英語の資格さえとっておけば、渡れた世の中が、いま逆に資格の保持者はふえたために、それはなんら価値をもつものではなくなっている。

そして自己を押し出す発信能力の次に必要なのが、人間と世界の研究だろう。わたしの学友に大会社の下請けで、魚屋をナリワイとしてきた。ある時、エビの買い付けで中国の養殖場に行ったはいいが、現地の調査がままならなかったり、事前の準備を十分にすすめることができなかつたのだろう。中国に行ったまま当地で風邪をこじらせ、彼は帰らぬ人となってしまった。また繊維業界で活躍していた学友は、手形知識の不備から姿を消した者もいる。

世の中、いやでも毎日なにか問題L生じてくるなかで生きるわけだから、人間と世界の研究が欠かせないことになる。それにはまず、書籍から入ることをお奨めしたい。

わたしは或る先達から教えられた言葉を大切にしている。その言葉とは、「自分の頭
のハエも追えない者が人の弊（へい）を言うな」ということである。どういうことかと
言うと、自分の頭ハエすらどうにもできない者は小者ということである。すなわち、
経験のすくない青二才のことだと思う。「人の弊（へい）を言うな」の「弊」とは悪い
ことを指す。また、その場しのぎの言い訳をするな、ということでもあると思う。

言い訳をしまいということは、責任をとるということである。いかなる場合でも、責
任ある行動と、生活をしろということになる。それに近頃、しっかりした人間関係が薄
れてきたと、わたしは思っている。個々人の責任があいまいで、たとえば公私の区別
がハッキリできていない。この話をこのまま続けると主題とかけ離れてしまうのでこれ
ぐらいにして、後日、この問題について考えることにする。

最後になるが、わたしは宮本武蔵が好きで、今まで何度も取り上げてきたが、武蔵は
晩年にまとめた「五輪の書」のなかで「わが事において後悔せず」と書いている。その
言葉の意味するところであるが、みずからが「かくあるべし！」と信じて行動し、実行
に移したことは、結果がどのようなものだろうと、絶対に後悔しないという強い意志の
表現である。それこそが究極の自己責任であると、わたしなどは思うのである。